

## 資料① 欠けと人生

### 欠けこそ生の証し

さて、われわれの日常生活は、完全を求めながら、欠けをならず営みであった。いま生きているという実感は、欠けによってはじめて得られる。欠けが魅力であるのは、そして、美人がほくろや八重歯によって、また顔をほころばせることによって、あるいは泣き、怒ることによって、生き生きとした魅力を表現するのは、それがわれわれのつりあいへの欲望をそそるからである。

欠けこそが、生きていることの証しとなる。食事をする。恋をする。すべて欠けを充足し、ならず生の営みである。欠けはならしを求める生の姿であるがゆえに、なまなましい美となる。この美は、民衆が人間としての権利を獲得したときに発見された。美醜の観念は、このときにまったく変った。

たとえばルオー（1871 - 1958年）の絵は、一見、まるでどろんこのようなものである。いわゆる美しい絵などでは、けっしてない。彼はカトリックのステンド=グラスの職人の子に生まれ、キリストやマリヤを描き、宗教画家といわれるが、同時に、道化や、犯罪者・売春婦を描いた。この人生的写実家の絵にはつねに無限感があって人を打つ。

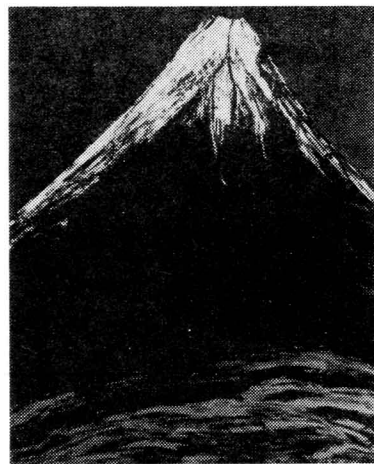
「あなたは、いつも満腹しているようなお方だ。」

というせりふは強烈な皮肉である。満ち足りた人間——それは一種腹立たしい。醜くすら感ぜられる存在である。熟睡・死・安定と同様に、そこには生命の感動がない。満たしたいと意欲するものがないからである。

### 欠けをならず永遠の営み

こうして生きることに、美の追求とは同じことであった。生も美の追求も、一つの欠けを満たしならしたあとには、また新しい欠けが現われる。絶えることのない欲求の連続である。生きるとは、永遠に欠けを追う人間の営みである。芸術の対象もまた無限の欠けである。そのゆえに、芸術家の前途は永遠に調和を求める無限軌道である。

（林 武『美に生きる』 講談社現代新書）



（林 武の作品）